

ダニエル書 - 第九十七番

エリヤの三重の適用：現代のバビロンとの対決における預言的ダイナミクスを解き明かす

Jeff Pippenger

2024-02-29

エリヤの三重の適用は、終末のエリヤの外的要素を表している。エリヤは一人の人物を表すが、同時に人々の運動も表す。使者であるエリヤに加わる人々の運動は、ラオディキアによって表される状態と経験から引き離される。

エリヤはすべての民のところに来て言った。「いつまで二つの意見の間でためらっているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、彼に従え。」しかし民は彼に一言も答えなかった。そこでエリヤは民に言った。「主の預言者として残っているのは、私、ただ私ひとりだ。だがバアルの預言者は四百五十人いる。」列王記上 18章21、22節。

第一の天使の運動であれ、第三の天使の運動であれ、その時代の使者に加わった者たちは、サルデスの教会かラオデキアの教会に象徴される歴史から呼び出された人々であった。どちらの教会も、民がいつまで二つの意見の間でためらうのかというエリヤの問いによって表されている。彼らがためらっている二つの意見は、ハバククの「論争」によって示されている。ハバクク書2章の「論争」とは、正しい方法論か誤った方法論かをめぐる論争である。この論争の時が到来したときに生きている人々は、ミラー派の歴史においても、終わりの時代の歴史においても、態度を決めるべきかどうか確信が持てず、たとえ決めるとしても、どちらの側に身を置くべきか定めかねている。ゆえに、彼らは一言も答えない。

主は、第一の天使と第三の天使の歴史において、論争の一方、すなわち背教的プロテスタンティズムの神学的方法論に代表される側か、あるいはFuture for Americaが採用している規則を含むミラーの予言解釈の規則という方法論か、どちらが「後の雨」の真のメッセージであるのかを明らかにする試練を定められた。アメリカ合衆国で間もなく到来する日曜法において始まるカルメル山の試練は、神がご自身の代表的使者が誰であるかを、エリヤの時や1844年のミラライトの歴史においてそうされたように、示されることを要求する。エリヤの場合や、見守りながらも立場を取ろうとしなかった者たちの場合と同様に、その方法論は、公にされた予言の成就によって確認されてきたし、これからも確認される。

ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。それらは互いに解き明かし合う。それらは、誰もが理解すべき真理を世界にもたらしている。これらの預言は、世界において証しとなるべきである。この終わりの時代にそれらが成就することによって、自ずから明らかになる。クレス・コレクション、105。

火が天から下ってエリヤのいけにえを焼き尽くしたとき、神は黙って見ていた人々に対して、エリヤが神の代表者であることを確証しておられた。しかしその時には、アハブ、

イゼベルと彼女の偽預言者たちにとってはすでに手遅れであった。これはミラー派の歴史においても1844年10月22日に先立って起こったことであり、また、1844年10月22日を型としている間もなく到来する日曜法に先立って、再び起こるだろう。残念ながら、その出来事まで判断を先延ばしにする者は、事実上、すでにこの問題で誤った側を選んだことになる。エリヤの使者の選びは、彼がアハブ、イゼベルと彼女の偽預言者たちと対峙する前に行われなければならない。エリヤのいけにえが火に焼き尽くされることによって確証がなされた後、エリヤは偽預言者たちを打ち殺した。

偽預言者は聖書預言における第六の王国であり、間もなく到来する日曜法の時に、第六の王国としての支配を終える。それは、エリヤが偽預言者たちを殺した時に相当する。その後、雨が本格的に降り注ぎ始まった。ミラー派の歴史においては、使者とそのメッセージは、状況の中で背教的プロテスタントとしての役割を果たし始めた者たちと対照される形で見分けられた。背教的プロテスタントは（エリヤの証言における偽預言者であり）、世界をハルマゲドンへ導く三つの勢力の一つである。神は1844年10月22日以後、新たに見分けられた真の預言運動が地上での御業を成し遂げるように定められたが、その運動はラオデキアへと移行し、ほどなくして法的に承認された教会となったため、「運動」であることをやめた。

第一のエリヤについてのこれらの要素を念頭に置き、今度は、終末の時代の第三のエリヤが誰であるかを特定し確証するために、第二のエリヤの預言的特徴を取り上げる。イエスは、旧約聖書の最後の預言を成就した者としてバプテスマのヨハネを指し示された。

見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父たちの心を子どもたちに向け、子どもたちの心を父たちに向ける。わたしが来て、この地を呪いで打つことのないように。マラキ書 4章5-6節

イエスはヨハネを来るべきエリヤであると語られたが、ヨハネは、来るべきエリヤについての預言のすべての要素を完全に満たしたわけではなかった。というのも、第三にして最後のエリヤは、「主の大いなる恐るべき日」の前に来るからである。この「日」とは、キリストの再臨で締めくくられる「最後の七つの災い」の時を指す。それでもなお、ヨハネは第二のエリヤであり、彼の証しは最初のエリヤの証しと相まって、第三にして最後のエリヤを明らかにし、確証する。

エリヤが現代のバビロンの竜・獣・偽預言者という三重の表象と対峙したのと同様に、ヨハネもまた、ローマの権力者（ヘロデ）、汚れた女（ヘロデヤ）、そしてその娘（サロメ）に直面した。カルメル山は1844年10月22日を象徴しており、それはさらにアメリカ合衆国における日曜法を表している。日曜法の危機において、三者連合が成立する。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

ヘロデの物語において、彼は異教ローマの代表者として、異教ローマの「十人の王」を代表する者であり、したがって、ひとときの間、自分たちの王国を淫婦に与える黙示録17章の十人の王を象徴していることが分かる。ヘロデはアハブによって予表されていた。両者とも不法な結婚関係にあった。イスラエルの者であったアハブには、イスラエル人でない女を娶ることが禁じられており、ヘロデは兄の妻を娶っていた。ツロとバビロンの淫婦が地の王たちと姦淫することは、アハブとヘロデがそれぞれイゼベルとヘロデヤと結んだ不法な関係によって表されている。

カルメル山でのアハブとの対決は、ヘロデの誕生日の祝いになぞらえて表現された。日曜法が出されると、アメリカ合衆国は聖書予言における第六の王国であることをやめ、十人の王が第七の王国となる。彼らが第七の王国としての誕生日に、ヘロデは酒に酔った宴の席で、ヘロデヤの娘サロメに王国の半分まで与えると約束した。十人の王は自分たちの王国を獣に与えることに同意し、そうする。彼らは偽預言者（アメリカ合衆国）に欺かれ、霊的に「酔って」いるからである。

カルメル山では、偽預言者たちが人々を欺こうとして一日中踊った。また、ヘロデの誕生日の宴では、ヘロデヤの娘サロメが、酔った王を欺くために踊った。こうしてヘロデヤの娘は、バプテスマのヨハネを殺すためのアハブの権限を取り付けた。アメリカ合衆国における日曜法の時に、アメリカ合衆国は、教権と政権が半分ずつから成る王国という、獣の世界的な像を受け入れるように、全世界を欺くであろう。三重連合の偽預言者であるアメリカ合衆国による世界の欺きは、イゼベルの預言者たちの踊りとイゼベルの娘（サロメ）の踊りによって前表されていた。というのも、イゼベルはカトリックであり、背教的プロテスタンティズムはその娘たち（サロメとして）だからである。

迫害は、死刑を含む間もなく制定される日曜日遵守法のときに始まる。これは、ヘロディアに象徴されるローマ教皇権のために第二のエリヤの首がはねられて籠に入れられることによって表されている。その時、ローマ教皇権の致命的な傷は完全に癒やされ、彼女はもはや忘れ去られなくなり、十四万四千人の旗印が掲げられるとともに、後の雨が限りなく注がれる。その時、イスラムが第三の災いとして打撃を与え、多くの水の上に座る大淫婦への段階的な裁きが始まる。彼女の裁きは二倍にされる。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」
ヨハネの黙示録 18:4-6

彼女の裁きは二倍とされる。というのも、538年から1798年に至る暗黒時代において彼女が行った殺害については、まだ裁かれていないからである。第五の封印においては、教皇制によって殺害された者たちが祭壇の下に象徴的に表され、神がいつローマの淫婦を裁かれるのかを問いかけている。そして彼らは、自分たちが殺されたのと同じように殺される第二の殉教者たちの数が満ちるまで、墓で休むようにと告げられる。彼女に裁きが下るとき、それは二倍とされる。というのも、そのとき彼女は神に忠実な民を二度にわたって殺したことになっているからである。

そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は祭壇の下に、神の言葉のゆえに、また彼らが持っていた証しのゆえに殺された者たちの魂を見た。彼らは大声で叫んだ。「いつまでですか、主よ、聖なる方、真実な方よ。地に住む者たちに対して、いつまであなたは裁きを行わず、私たちの血のかたきを討ってくださらないのですか。」そして、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ、さらに彼らに言われた。「しばらくのあいだ休んでいなさい。あなたがたの仲間のしもべたちや兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで。」黙示録 6:9-11.

ホワイト姉妹は、第五の封印の殉教者に関する箇所を、神のほかの群れがバビロンから呼び出される日曜法の時点に位置づけている。これはヘロデの誕生日の宴に当たり、その時、十人の王たちは自分たちの第七の王国を、七つのうちの一つである第八の王国に譲り渡すことに同意する。

「第五の封印が開かれたとき、黙示を受けたヨハネは、幻のうちに、神の言葉とイエス・キリストの証しのために殺された人々が祭壇の下にいるのを見た。これに続いて、忠実で真実な者たちがバビロンから出て来るよう召し出される、黙示録第18章に記された光景が現れた。[黙示録18章1-5節、引用]」『Manuscript Releases』第20巻、14頁。

バビロンから出るように召された者たちは、ヘロデヤが第二のエリヤにしたのと同様に、教皇制によって殺害される第二の殉教者の群れを成す。ホワイト姉妹はまた、第五の封印を最後の封印が解かれるときに位置づけている。

「そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は、神の言葉のゆえに、また彼らの持っていた証しのゆえに殺された人々の魂が、祭壇の下にあるのを見た。彼らは大声で叫んで言った、『聖にして真実なる主よ、いつまでですか。地に住む者たちに対して私たちの血の裁きを行い、復讐してくださらないのは。』また、白い衣が彼ら一人ひとりに与えられ[彼らは清く聖なる者と宣言された]、なおしばらくの間休むようにと言い渡された。彼らの仲間のしもべたちや兄弟たちで、自分たちと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで。」[黙示録 6:9-11] ここでヨハネに示された光景は現実そのものではなく、将来のある時期に起こるであろう事柄であった。

「『ヨハネの黙示録』8章1~4節を引用。」『Manuscript Releases』第20巻、197頁。

暗黒時代に教皇制によって殺害された人々の祈りは、「第七の封印」の開封の際に「覚えられる」のであり、それは「第七の封印」がまもなく施行される日曜法において開封されることを示している。なぜなら、そこで神が彼女の不義を覚えておられるからである。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を思い起こされた。彼女があなたがたにしたように、彼女に報いよ。その行いに応じて、彼女に二倍を返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。」ヨハネの黙示録 18:4-6

第一のエリヤは、終末の時代に世界をハルマゲドンへと導く三重の連合と十四万四千人との間に起こる対立について証言する。第二のエリヤ（バプテスマのヨハネ）は、第一のエリヤの証言を繰り返し、さらに拡大し、両者は（行に行を重ねて）第三にして最後のエリヤの預言的特徴を特定し、確立する。第三のエリヤは、始まりのエリヤ（ミラー）と終わりのエリヤによって表される。というのも、第一の天使の運動が第三の天使の運動において繰り返されるからである。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置を与えておられ、その働きはこの地上の歴史が終結するまでやむことがない。第一と第二の天使のメッセージは、今の時代においてもなお真理であり、後に続くものと並行して進むべきである。『1888年の資料』803、804。

第三のエリヤはアルファとオメガのしるしを帯びている。なぜなら、それは初めと終わりのエリヤを表しているからだ。最初のエリヤと最後のエリヤはいずれも、黙示録14章の第一の天使か第三の天使の運動を表している。

バプテスマのヨハネの働きと、終わりの日にエリヤの霊と力をもって人々を無関心から目覚めさせるために出ていく者たちの働きとは、多くの点で同じである。彼の働きは、この時代になされなければならない働きの型である。キリストは、義をもって世をさばくために、再び来られる。世界に与えられる最後の警告のメッセージを担う神の使者たちは、ヨハネがキリストの初臨のために道を備えたように、キリストの再臨のために道を備えなければならない。この備えの働きにおいては、「すべての谷は高められ、すべての山は低くされ、曲がった所はまっすぐにされ、険しい所は平らにされる」。歴史は繰り返され、もう一度「主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の御口がこれを語られたからである」。

サザン・ウォッチマン、1905年3月21日

エリヤの三重の適用は、エリヤおよびエリヤに関連する運動と、現代のバビロンの三重連合との対立を表している。これは、契約の使者のために道を備える使者の三重の適用と密接に関連しているが、その系列は運動と使者の内的な動態を表している。いずれの三重の適用においても、使者と運動の第三にして最終の成就是、初めの成就と終わりの成就としてアルファとオメガによって表されている。

第三で最後のエリヤは第三の天使の運動を象徴している。それは十四万四千人の運動であり、黙示録十一章の大地震の時が到来するとき、彼らは旗印として高く掲げられ、バビロンから大群衆を呼び出す。その時刻に先立って、使者とその運動は、平和と安全の偽の後の雨のメッセージを唱える偽の運動と対比されるかたちで識別される。

真のメッセージと偽りのメッセージ、そして使者の区別は、そのメッセージの成就によって見分けられる。これらの記事は2023年7月末に始まり、10月7日の虐殺よりはるか以前から、真の後の雨のメッセージが第三の災いに該当するイスラムを特定し、そのメッセージは2001年9月11日に始まったことを明らかにしていた。記事はまた、靈感によればその時に始まった諸国民の怒りは産みの苦しみをする女のように、ゆえに地球にもたらされる怒りと苦難は恵みの時の終わりまでエスカレートし続けると指摘していた。

次回の記事でこの研究を続けます。

ああ、神の民が、いまやほとんど偶像礼拝に陥っている幾千もの都市に迫る滅びを悟っていたなら！しかし、真理を宣べ伝えるべき多くの者たちが、兄弟を告発し、断罪している。神の回心させる力が人の心に臨むとき、明確な変化が起こる。人々は、批判したり、壊そうとしたりする気持ちを持たなくなる。彼らは、光が世界に輝くのを妨げる立場には立たない。彼らの批判も、告発も、やむ。敵の勢力は戦いに向けて集結している。厳しい戦いが私たちの前に控えている。固く結束しなさい、兄弟姉妹たちよ、固く結束しなさい。キリストと一つに結ばれなさい。「『陰謀だ、と言ってはならない。…彼らの恐れるものを恐れるな、おののくな。万軍の主を聖とせよ。彼をあなたがたの恐れとし、あなたがたのおののきとせよ。彼は聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にはつまずきの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、罟となる。彼らの多くはつまずき、倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられる。』」

世界は舞台である。その役者たち、すなわちその住人は、最後の大いなる劇で自らの役を演じる準備をしている。神は人々の視界から消えている。人類の大多数においては、利己的な目的を達成するために人々が結託する場合を除いて、何の一致もない。神は見ておられる。反逆する者たちに関する神の御旨は必ず成就する。神が混乱と無秩序の諸要素にしばしの間、支配を振るわせることをお許しになっているとしても、この世界は人間の手に渡されたのではない。地の底からの力が、劇の最後の大いなる場面を引き起こそうとして働いている。すなわち、サタンがキリストとして現れ、秘密結社で互いに結束している者たちのうちに、不義のあらゆる欺きとともに働くのである。結託への情熱に身を委ねている者たちは、敵の計画を実行している。原因には結果が伴う。

「不法はほとんど極みに達した。混乱が世界を満たし、間もなく大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、間もなく世界に圧倒的な驚きとして突然押し寄せる事態に備えるべきである。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年9月10日。